

富山大学人文学部令和5年度卒業論文

社会への適合に抗するささやかな痕跡
—大学生による「社不」の語用分析—

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 12010039
氏名 岡村 亜依

〈目次〉

第1章 問題関心	1
第2章 先行研究	2
第3章 概要	4
第4章 分析	
第1節 Cさんおよびシャフテ軍団の「社不」をめぐる発話と行動	5
第2節 シャフテ軍団の営み	
第1項 シャフテ軍団結成の経緯	8
第2項 シャフテ軍団の活動	10
第3節 「社会不適合者」と「社不」	
第1項 C、B、A自分自身を「社会不適合者」と感じているか	12
第2項 なぜ「社不」と省略するのか	14
第3項 「社会不適合者」への曖昧な距離感と「社不」	16
第4節 Cさんとシャフテ軍団のいま	17
第5章 考察	
第1節 「社不」が使われる場の限定性——自虐性と笑い——	18
第2節 彼、彼女たちにとっての社不とは	20

第1章 問題関心

本来なら、「コミュ障」や「陰キャ」などの言葉は、内気で他人とうまく話すことができなかったり、言動が暗かったりする人を指す悪口的な意味を持っている。しかし、若者の間では、相手をいじる際や自虐ネタにこれらの言葉が使われることが多々ある。

近年、Twitter や Instagram などの SNS において、「自分は社不だから〇〇」という内容の投稿を目にすることが何度かあった。「社不」は、「社会不適合者」を省略した言葉であり、本来ならコミュ障や陰キャと同じようにネガティブな意味を持つ言葉であると考えられる。

本稿では、若者たちはどのような人物のことを社不であると考えているのか。どのような意図で「社会不適合者」や省略形の「社不」という言葉を使うのか。それらを明らかにし、若者にとっての「社不」に迫っていきたい。

第2章 先行研究

貴戸（2018）では、「コミュニケーション能力」と「コミュ力」という言葉の区別について、以下のように記述されている。

細かく見てみれば、「コミュニケーション能力」といわゆる「コミュ力」と呼ばれるもののあいだには、ニュアンスの違いがあると思う。それは、「コミュニケーション障害」と「コミュ障」の隔たりに相応するような違いだ。すなわち、「コミュニケーション能力」が、仕事の場面や一般的な対人関係などより広い文脈で使われる印象が強いのに対し、「コミュ力」はどちらかといえば、学校のクラスなどより限定された場や集団に違和感なく馴染んで「和気あいあいと」「楽しく」過ごせるか、という点が焦点になっているように見える。（貴戸 2018: 26-17）

また、貴戸（2018）によれば、「コミュニケーション能力」とされている力には、以下のようなものが挙げられる。

- ・ 外国語運用、プレゼンテーション、ディベートなどで用いられる技術的な能力
- ・ 背景の異なる他者を理解し自己を発信する異文化コミュニケーションの能力
- ・ 就職活動や AO 入試などの面接などで「自分の物語」を語り、受け答えする能力
- ・ 合コンや営業などで一般的な相手に不快感を与えず距離を縮めていく能力
- ・ 友人や恋人など特定の親密な他者と関係性を築く能力
- ・ ケアや教育の現場などで相手のニーズを汲み取る能力

そのうえで、以下の力が「コミュ力」として挙げられている。

- ・ 学校の休み時間などに可視化される、周囲の空気を読み、ノリに合わせて盛り上がる能力

このような「コミュニケーション能力」と「コミュ力」のニュアンスの違いが、「コミュニケーション障害」と「コミュ障」のそれぞれに相応し、区別が生まれる。つまり、「コミュ障」と短縮されることによって、使われる場面がより限定的になっているのだ。

また、「コミュ障」とされる人は、コミュニケーションがうまくいかないこと自体よりも、そのような姿を他人から見られている自分を客観的に捉えてしまうことで、その気まずさからコミュニケーションに更なる支障をきたしてしまう。そのような状態から抜け出したという考えから、「コミュ障」を「克服する」「治す」というような使われ方をすることも多い。このことから、貴戸（2018）では、『「あいつコミュ障だよな」という外からの揶揄で

あると同時に、「私コミュ障だから」という内からの自虐の言葉なのだ。』であるとも述べられている。

以上のことから、「コミュ障」という言葉の場合、言葉の短縮に2つの特性があると考えられる。1つ目は、学校のクラスなどのような若者にとっての身近で限定的な場面で用いられるということ。2つ目は、自虐性があるということである。本稿では先行研究と比較し、「社会不適合者」を短縮した「社不」という言葉にも、この2つの特性が見られるのかを分析していく。この言葉は、社会に適合できない人という意味からも分かるように、「社会」が対象である。「社会」は非限定的な場面であるため、その点において「コミュ障」とは使われ方が異なるのではないかと推測する。しかし、自虐性があるという点においては、「コミュ障」と共通していると推測する。本稿の調査対象者たちは、何故「社不」という言葉を使うのかを分析し、2つの特性について明らかにしていきたい。

第3章 調査概要

本稿では、SNS上に「社不」に関する投稿をしていたことがあるAさん、Bさん、Cさんにインタビュー調査を行った。

Cさんは、以前、自身のInstagramのサブアカウント（以下「サブアカ」と表記することもある）の名前が「社不」だった。お酒で潰れたり学校に行けなかったりした際に、サブアカで、「自分は社不だ」という内容のストーリーをしばしば挙げていた。

Aさん、Bさんは、社不という言葉に因んだ「シャフテ軍団」と称するグループに所属している。シャフテ軍団は4人で構成されており、定期的に旅行をしていた。その際、ふざけた行動や逸脱した行動をし、そこで撮った写真や動画をストーリーに挙げていた。

〈インタビュー어의プロフィール〉（2023年度後期時点）

【Aさん】大学4年生男性

- ・「シャフテ軍団」の1人。
- ・Instagramのサブアカのストーリーにおいて、シャフテ軍団に関するものを少しだけ投稿している。
- ・Instagramのフォロワー数は、メインで使っているアカウント（以下「メインアカ」）550人、サブアカ約100人
- ・就職活動は終了済み。

【Bさん】大学3年生男性

- ・「シャフテ軍団」の1人。
- ・Instagramのサブアカのストーリーに投稿する頻度が高く、シャフテ軍団に関するものも多く投稿していた。
- ・Instagramのフォロワー数は、メインアカ約1000人、サブアカ約150人
- ・就職活動はこれから。

【Cさん】大学4年生女性

- ・以前、Instagramのサブアカの名前が「社不」であった。（現在は異なる）
- ・Instagramのフォロワー数は、メインアカ約450人、サブアカ約30人
- ・サブアカでは恋人、友人、趣味などについて幅広く投稿している。
- ・就職活動は終了済み。

第4章 分析

この章では、まず C さんの発話や行動、考えについて記述し分析する。そのうえで、かなり特殊な例と思われる A さん、B さんの「シャフテ軍団」について取り扱う。

第1節 C さんおよびシャフテ軍団の「社不」をめぐる発話と行動

C さんは、Instagram のサブアカウントの名前が「社不」だった時期があった。そして、「自分は社不だから〇〇をしてしまった」という内容のストーリーをしばしば出していた（引用中のカッコは引用者による補足、以下同様）。

岡村：今は違うけど、元々サブアカの名前が社不だった理由を教えてください。

C：そのとき自分が色々社会不適合っぽいことをしていたのを吐き出すアカウントとか、色々投稿するアカウントっぽい感じだったから。

岡村：具体的にどういうところが社会不適合者っぽかったとかある？

C：普通の人はこちら朝早く起きて1日こういうことしてっていうのが（できるけど、自分は）全く動けず何もできない日があったりすると、やっぱり思うところがある。二日酔いで授業飛んだとか。

C さんは、サブアカウントの名前を「社不」にしていた理由として、その頃の自分の行動が社会不適合者のようで、その事実を吐き出すためのアカウントだったことを述べていた。そして、その頃の社会不適合者のような行動の例として、二日酔いで授業に行けなかったことを挙げており、そのような行動をしてしまった際に、ストーリーを出していたそう。そこで、そのようなストーリーを出す意図を質問したところ、以下のような回答が得られた。

C：1個は、おもしろいって思った。友達のこういう行動がおもしろいからとか、自分のこういうところが社不だからとかっていうので、おもしろいから笑いを取るみたいな目的がひとつ。あとはなんか、私は結構発散したいタイプ、いろんな嫌なこととかを発散して、他人からの承認欲求が欲しいタイプだから、口で言うとかじゃなくてストーリーとかでパッと見れるような、一気に何人かがパッと見れるような媒体を通して発散するみたいな目的で出す。

C さんは、そのようなストーリーを出す理由を2つ挙げていた。1つ目は、自分や友人の社会不適合的な行動を面白いと感じ、それを共有するため。自分の行動は自虐的に、友人の行動はいじりのように書くことで、見ている人に面白さを共有しようとしていることが考えられる。2つ目は、社会不適合者のような行動をしてしまったことを他人に知ってもら

うため。「承認欲求」「発散」という言葉から、Cさんは、自分の状況や心情を誰かに知ってもらいたいという気持ちを持っていることが考えられる。そのため、社会不適合者のような行動をとってしまった際には、ストーリーを出すことで承認欲求を満たしている。これらのことから、Cさんは、社会不適合者のような行動をしてしまった際、「社不」という言葉を用いることで自虐的に表現し、それを他人に共有することによってマイナスな気持ちを発散しようとしているのではないかと推測する。

しかし、Cさんは、Instagramのメインアカウントでは、このようなストーリーを一切挙げていない。また、サブアカウントにおいても、“投稿”という形では残していない。そこにはどのような意図があるのだろうか。

岡村：Cが社不の投稿するのがインスタのメインアカウントじゃなくて、サブアカの、しかもストーリーで出しとるのに何か理由はある？

C：公にする情報じゃなく、仲良い身内だけに発信する内容な気がして。自分の性格とかを全部出す、バイト先の後輩とか普通の関係の人には出したいくない情報だから、自分の信用できる仲の良い人だけのところに出しとったみたいな感じ。

Cさんは、サブアカウントを使う理由として、繋がっている人との親密度を挙げていた。社不に関する投稿は、メインアカウントで繋がっているすべての人に見せるものとしてふさわしくないと考えている。そして、自分自身もそれを誰にでも見せることはしたくないと思っている。そのため、信用できる仲の良い人とのみ繋がったサブアカウントを使っていることがわかる。

岡村：ストーリーで出すことに理由はある？

C：ストーリーのほうが、そういうことが起こったときに瞬時にパッと出せるのがあるのと、時間経って消えやすい、投稿だったら自分で消すっていう方法をとらんなんけど、ストーリーやったら確実に24時間で消える楽しさもあると思う。

Cさんは、ストーリーで出す理由として、瞬時に出すことができる、24時間で勝手に消えるという2点を挙げていた。投稿は自分で消さない限り残り続けるものであるため、投稿する内容、写真や文章を熟考する人も多いだろう。その一方で、ストーリーは24時間で消えるという点から、それなりの写真や文章を選び、気軽に投稿できる人が多いと考えられる。Cさんの場合、友人や恋人と過ごしたイベントというような思い出の投稿をしている。このような投稿をする際には手間を感じることは少なく、むしろ写真や文章を楽しんで選んでいるのではないだろうか。しかし、社会不適合者のような行動をしてしまったという内容は、それには該当しない。そのときの承認欲求はあるが、それを満たすことができれば、後には残ってほしくない内容であるということも考えられる。このことから、社不だと感じ

る出来事があった際、そのときの状況や心情を手軽に書き承認欲求を満たすのには、ストーリーが適しているのだと考えられる。

第2節 シャフテ軍団の営み

第1項 シャフテ軍団結成の経緯

この節では、調査対象者 A と B が所属するシャフテ軍団が結成される過程について説明する。

本稿ではインタビューを行っていないが、シャフテ軍団に所属する残りの 2 人をここでは D さん、E さんとする。D さんは 2023 年 3 月に大学を卒業しており、現在は社会人 1 年目。E さんは 2023 年度後期時点大学 4 年生である。

A さんと B さん、D さんの 3 人は高校が同じであった。A さんと D さんは高校時代に一緒の部活動に所属していたため、歳は 1 つ異なるが、大学に入学する前から仲が良かった。A さんと B さんは実家が近かったため、小さい頃から仲が良かった。B さんは大学に入学すると、A さんと仲の良い D さんとすぐに仲良くなった。

他方で、E さんは、大学で A さんと同じサークルに所属していて仲が良かった。その同じサークルに B さんも入ったため、B さんは E さんとも仲良くなった。

D さんと E さんは、A さんの繋がりですぐ仲良くなったと考えられる。

彼らが「シャフテ軍団」と名乗るようになったのは、おそらく 2021 年の冬ごろからである。

A さん、B さんにシャフテ軍団がどのような経緯で発足したのか質問したところ、以下のような回答が得られた。

A：元々サークルで頭がおかしいとか変わってるって言われてて、他にも変わってる人がいて、その変わってる人らで仲良くなって、シャフテ軍団って呼ぶようになりましたね。毎回旅行行くんですけど、そこで 4 人でラブホテルで泊まって、お酒を飲んだり、人前で恥ずかしいことをするのも全然気にしない。

B：旅行行こうってなったんですね、そのメンバーで。行ってる道とかでテンション高ぶって奇声発したりとか、普通の人やったらビジネスホテルとか泊まると思うんですけど、ラブホテル泊まったんですよ。そこで寝た人を熱いお風呂とかに入れたり、それを見て楽しんだりしてるところとかから見て、なんか社不かなみたいなの。あと、旅行の 2 日目にごはん食べたんですけど、そのあとタバコ吸おってなって、その店の横にベンチがあって、そこでタバコを吸ってはいけませんって書いてあるのにその中の 1 人が吸ってて、あっ、社不やなって思いました。

岡村：誰がシャフテ軍団にしたん？B？

B：〇〇くん (D さん) っていう僕らの団長がいるんですけど、その経緯としては、僕たちがやってる行動って社会的に見たら変なことで、多分結構煙たがられるようなことな

んで、社会に認めてもらえないシャフテ軍団みたいな。

2人の発言から、シャフテ軍団の結成に対する共通の認識があるわけではないことがわかる。しかし、旅行に行った先で、一般的な人々はしないようなことをしていたということが共通して読み取れる。また、Bさんの発言から、シャフテ軍団というのはDさんが命名したということもわかる。これらのことから、旅先での一般的ではない行動を通じて、自分たちは社不であると考えたDさんが、シャフテ軍団というグループを作ったのではないかと推測する。

第2項 シャフテ軍団の活動

第1項での2人の発言やInstagramのストーリーから、彼らは日常的に共に過ごしているわけではなく、旅行をするというのが主な活動であることがわかる。Bさんのストーリーのハイライトに残されていた、旅先での彼らの社不としての行動を以下に記す。

- ・ガソリンスタンドで1人が両手でノズルを銃のように持ち、他のメンバーを撃つ真似をする。
- ・寝ているメンバーを熱湯風呂へ運び、その中に落とす。
- ・「ここでたばこを吸うのはご遠慮くださいね」という張り紙の前に置いてあるベンチでたばこを吸う。
- ・ラブホテルの窓を外す。

Bさんは、以上のようなストーリーをサブアカウントで出している。しかし、Bさんは、メインアカウントではシャフテ軍団のこのような行動を一切投稿していない。そこにはどのような意図があるのかを質問した。

岡村：Bがシャフテ軍団の投稿をするのがインスタのサブアカ、しかもストーリーが多いじゃん。その理由はありますか？

B：これ僕、自分で言うのはあれなんですけど、結構有名なんですね。有名って言うか顔広い。てなると、友達の子の友達とかまでインスタが繋がってるわけなんです。だから、インスタグラムのフォロワーが結構多いんですよ。(中略) あんま表向きにはそういうふざけた行動をしてるのを見せれないっていうのと、あとストーリーって結構ステータスというか、大学入ってこんななったんやーとか自分が友達のストーリー見てて思うんですけど、そういう共感性羞恥っていうのを感じさせてしまうので、限られたメンバーでそれを笑ってくれる人に向けて発信してるって感じですね。

(中略)

岡村：やっぱその見せたい人以外には見られたくないみたいなの？

B：いや、見てもらってもいいんですけど、そこでどう思われてるかなみたいな不安があるんで、極力見せないようにする。

Bさんには、シャフテ軍団を載せるのにサブアカを使う明確な理由があった。それは、繋がっている人の規模の狭さである。Bさんは、地元でも大学でも顔が広いため、メインアカウントのフォロワー数が多い。そのため、メインアカウントで投稿すると、あまり親しくない人からも見られてしまう。Bさん自身、友人のストーリーを見て、大学生になって粹がっているような印象をもち、共感的にはあるが見ていて恥ずかしいような気持ちになった

ことがあり、メインアカウントの読者も同様の恥ずかしさを覚える人がいるのではないかと恐れている。だからこそ、そのような彼らの行動を笑ってくれそうな人だけをフォローしているサブアカにおいて、シャフテ軍団を載せているのだ。

岡村：サブアカに元々投稿もあったけど今は結構ストーリーだけじゃないですか。そういうのも理由とかあるんですか。24時間で消えるからとか、そういうのは別に？

B：それは全部ハイライトとして作るんで全然問題なくて。投稿消した理由ってことですよ。

岡村：そうですね。

B：投稿するのって手間が必要なんですね。この友達にこの時間を自分の中で費やしたら無駄やなーとか。めっちゃ好きな友達に対しての投稿とかやったらいいんですけど、広く浅く仲良くなった人の投稿に対してとかする前にめんどくさくなっちゃって、ストーリーだけでいいやって。

Bさんは、以前はサブアカの投稿において、飲み会があったり友人と遊んだりした際に、比較的高い頻度で投稿していた。しかし、現在はカフェで撮った写真を数枚投稿しているだけであり、主にストーリーを出している。そこには、コストを考慮した理由があった。ストーリーと比べて、投稿には写真や文章を考える時間がかかってしまう。Bさんは、比較的親しくない人に対する投稿をする際にかかる労力を面倒だと感じてしまうようだ。そのため、サブアカではあるが、そこまでの労力をかけてまで投稿したいとは思わないため、手軽に出すことができるストーリー機能を使っていることがわかる。

とを社不とか社会不適合者って言ったりはしますか。

B：しないですね。基本みんなが集まって社不かなって思います。

「礼儀正しい」「素直」という発言から、Bさんは比較的常識的な人間と自分をみなしていることが読み取れる。また、「そっち（社不ではない一般的な人）とそっち（シャフテ軍団）のどちらにも合わせられる」「1人のときは社不ではない」という内容の発言から、Bさんは、シャフテ軍団のメンバーと一緒にいるときにのみ、自身のことを「社不」であると思っていることが分かる。すなわち、Bさんにとっての「社不」は、一種の「キャラ」のようなものではないかと考えられる。インタビューの際に、社会不適合者と社不の二択の他に、「一般人」というような選択肢があれば、それを選んでいたのかもしれない。以上のように、AさんとBさんでは、「社不」である自分に対する認識に違いがあった。

そして、Cさんに自分自身のことを「社会不適合者」であると思うかどうか質問したところ、以下のような回答が得られた。

C：思うときもあれば、真面目やなって思うときもあって。

岡村：こういうときに社会不適合者って思うみたいなんある？

C：それこそうちもめっちゃ感情の起伏、情緒不安定あるから、病んどるときは普通の人が思わんことを思っとるとか。普通の人はこちら朝早く起きて1日こういうことしてっていうのが（できるが、自分は）全く動けず何もできない日があったりすると、やっぱり思うところがある。

Cさんは、周囲の人々がしていることをできないときやメンタル的に落ちているときに、自身のことを「社会不適合者」であると思うそう。反対に、自身のことを真面目な人間だと思うときもあるという発言も見られる。就職活動において、社会不適合者であることに悩んだかどうか質問した際、以下のような回答が得られた。

C：それで言うと逆に多分私は、社会に合つとる人な気がしてて。普通に多分仕事しようと思つたらできるし、きつと真面目に働いてそこにやりがいが見いだせる側の人間。で、自分は元々めっちゃ真面目なのを自分で分かつとるから、就活中は社不やなーとは思わずに生きてるって感じ。

Cさんは、就職活動の期間中、自分が携わりたい業界の研究や自己分析、面接に熱心に取り組んでいる内容のストーリーを度々投稿していた。そのような経験を経て、本来は真面目な人間であるという自身の特性を再確認し、それは「社会不適合者」のものではないと考えたのではないだろうか。

第2項 なぜ「社不」と省略するのか

「社会不適合者」と「社不」という言葉の違いについて質問したところ、Aさんからは以下のような回答が得られた。

A：社会不適合者って一般的に言うと、職がないし、自分自身に自信持ってない人とか、あとなんか不遇なことがあって引きこもり、ニートとかなんですけど。自分もまあニートになりたいとか、やるのがめんどくさいとか、もう人と関わるのがめんどくさいとか思いますが、僕らのシャフテの社不は、社会不適合者の考えを持ってんだけど、社会不適合者じゃないんですよ。

A：そのシャフテ軍団の社不っていうのは変なこと、おかしいことをするから社不って呼ばれてるんで。社会不適合者って多分、家に引きこもるとかの社会不適合者だと思うんですけど、おかしいこと、人と違うことをしているから社不って呼ばれてるんやと思います。

Aさんは、社会不適合者の例として、働かずに引きこもっている人や自分に自信がない人などを挙げている。Aさん自身が彼らの考えに共感することもあるそうだが、自分は社会不適合者ではないと述べている。後半の発言では、シャフテ軍団でのふざけた行動や逸脱した行動が社会に適合していないため、彼らは社不と呼ばれていると述べている。このことから、Aさんにとって、「社不」という言葉には「ふざけ」や「ネタ」という要素が大きいということが分かる。

Bさんは次のように語っている。

B：なんかニュアンス的に社不のほうが使い慣れてる感じかな。なんか社会不適合者ってガチで重くなるけど、社不にしたらちょっと楽な気持ちになるかなみたいな。

岡村：うんうん、ちょっとネタっぽくみたいな＝

B：＝ネタっぽくできる。ストーリーとかに社不って書けるし。社会不適合者とも書けるけど、社会不適合者までいったらなんかちょっと重いかなって。

Bさんは、「社不」は「社会不適合者」よりも、ネタとして軽い気持ちでSNSに書くことができると考えている。しかし、「社会不適合者」と書くこともできるが、それは重いという印象があるようだ。

Cさんは次のように語っている。

C：社不っていう言い方やと大学生の、うちらみみたいな年齢がちょっと遊び過ぎてとかしたときに、お前社不やんみたいなノリで使う系だと思ってる。

C:ほんとの社会不適合者って、なんか鬱病で仕事に行けずやめたとか、人と合わせて動くことが苦手とか、どちらかと言うと ADHD みたいな、差別的になったらあれやけど、そういう人はちゃんと社会不適合者って言う気がしてて。

Cさんは、「社不」という言葉はノリで使うというイメージを持っていた。一方で、「社会不適合者」という言葉に対しては、いくつか例を挙げており、社会と自分の間に何か悩みを持つような人を指していた。

以上のことから、3人とも「社会不適合者」と「社不」という言葉には、ニュアンスの違いがあると考えていることが分かる。「社会不適合者」は、社会や周囲に対して悩みがあったり、それによって生活に支障をきたしてしまったりするような重いイメージ。「社不」は、自分たちの良くない行動を自虐的に表したり、ノリで使ったりするような軽いイメージ。このことから、「社不」と省略することによって、「社会不適合者」の本来の重みが消え、自虐的に自分を表したり、他人をいじったりできる言葉と化していると言うことができる。

第3項 「社会不適合者」への曖昧な距離感と「社不」

第1項、第2項から、Aさん、Bさん、Cさんの3人とも、自身のことを本来の「社会不適合者」だと思っているわけではないということが読み取れる。しかし、AさんとCさんは、すべきことができていないときなどに、自分には「社会不適合者」的な一面があるのではないかと考えている。このことから、AさんとCさんにおいては、自分自身に何らかの逸脱性があると思っていることがわかる。一方でBさんは、自分には「社会不適合者」的な一面があるという発言はしていなかった。しかし、Aさんのような逸脱性がある人にも合わせることができると述べていた。以上のことから、彼らは、「社会不適合者」という言葉に対する曖昧な自己を持っていることが考えられる。また、そのような曖昧な自己を表現するために、「社不」という言葉を使っている。彼らは、この言葉に対して、「社会不適合者」よりは軽いものであるというイメージを持っている。そのため、曖昧な自分自身のことを「社不」と自称することには、抵抗感を抱いていないのではないかと考える。

第4節 Cさんとシャフテ軍団のいま

この節では、特に就職活動を経て、3人の行動や考えに変化があったのかについて述べる。

岡村：じゃあ、就活終わってから今に至るまでで、自分のことをどう思ってる？

C：私は、社会にこれからも普通に溶け込めるな—ってこの期間も思ってた。私バイトで時間帯責任者を今やってて、その時間の責任が自分にあって、なんか起こったら私に対応しなきゃいけないとか、店長に伝言しなきゃいけないとか、その時間のなんとかしなきゃいけない係っていうのを今やってて。それって社会に出る前の準備みたいな感じ、社会に出ても役に立つ経験だと思ってて。そういうのを卒業までの期間にやってるから、普通の大学生よりかは、社会に出たときの責任を負うっていうことを先に経験してるから、他よりは成長してるのかなっていう気持ちはある。

Cさんは、就職活動が終了してから、以前までのような社不に関するストーリーを出すとはなくなった。このような行動の変化には、Cさんの中で、自分は社会に適応できる人間であるという意識が増していることが関係しているのではないかと考える。Cさんは、アルバイトにおいて責任のある役割を果たしており、そこで得たものは社会に出てからも役立つと考えている。そして、そのような現在の自分と想像する未来の自分は、「社会不適合者」でも「社不」でもない人物像であるのだろう。

また、シャフテ軍団に関しては、Dさんが卒業し富山を離れてから、4人で旅行をしていない。そのため、AさんとBさんのサブアカウントにおいて、シャフテ軍団のストーリーはしばらく出されていない。

第5章 考察

第1節 「社不」が使われる場の限定性——自虐性と笑い——

本稿の調査対象者である A さん、B さん、C さんでは、自身を社会不適合者だと感じるかどうかにか考え方の違いがあった。しかし、各々が考える社会不適合者の像は、「社会」という非限定的な場面に出ている人物のものであった。これは、社会不適合者の省略形である「社不」にも、同様のことが言うことができた。この点で、貴戸（2018）における「コミュ障」の限定的な場面で使われるという特性とは異なっていた。

しかし、B さんと C さんは共通して、社不という言葉 Instagram のサブアカウント上でしか使用していなかった。そこには、社不という言葉で表す自分自身というのは、自身が決めた特定の人にしか見せたくないという理由があった。このことから、「社不」は、使われる場面は非限定的なものであるが、使う相手は限定しているのではないかと考える。例えば、学校のクラスという限定的な場面において、「私コミュ障だから上手く話せない」と言っている人がいても、その光景は傍から見ても自然なものであるだろう。しかし、Instagram という非限定的な場面において、「私社不だから他人と同じようなことができない」と言っている人がいると、その光景に違和感を覚える。このように、社不は誰を相手にしても自称することができる言葉ではないため、B さんと C さんは、サブアカウントのストーリー上でしか使わないのだと考える。

貴戸（2018）では、「コミュ障」という言葉は、『「あいつコミュ障だよな」という外からの揶揄であると同時に、「私コミュ障だから」という内からの自虐の言葉なのだ。』と述べられている。この特性は、「社不」にも見られるものであると考える。第4章第1節第1項における C さんの発言から、C さんは、友人の社不だと思った行動もストーリーに出していたことが読み取れる。このように、社不は、相手を「お前社不じゃん」というように揶揄する言葉でもあるとすることができる。そして、C さんが「自分は社不だから～」とストーリーに書いたり、シャフテ軍団が逸脱的な行動をした際に「社不」という言葉を用いたりするように、自虐的な使われ方もする。これらのことから、「社不」には、「コミュ障」と同様に自虐性があり、その点において類似していると考えられる。C さんは、社不に関するストーリーを出す理由として、そのような自分のストーリーで笑いをとることによって承認欲求を満たすためだと述べていた。また、B さんも同様に、シャフテ軍団のことを笑ってくれる限られた友人だけと繋がったサブアカのストーリーを使い、承認欲求を満たしていた。このような笑いをとって承認欲求を満たすという特性が「社不」には見られた。この特性は、自虐性があるという点で共通していた「コミュ障」にも見られるものであると考える。上記のように、「私コミュ障だから上手く話せない」と自虐的に言っている人がいても不自然に感じることはなく、むしろそれによって笑いをとることができる可能性もあると考えられる。このように、「社不」と「コミュ障」は、その言葉によって笑いをとることで承認欲求を満たす

という特性があるという点でも類似していると考え。

第2節 彼、彼女たちにとっての「社不」とは

本稿の調査対象者である A さん、B さん、C さんは 3 人とも富山大学の学生である。A さんは、学生という身分がある以上、自分は社会不適合者ではないと考えていた。しかし、学校に行かず引きこもっている日などがあると、自身のことを社会不適合者なのかもしれないとも感じていた。また、C さんも、周囲の人々は一般的なタイムスケジュールで動いているのに、自分は何もできなかった日に、自身のことを社会不適合者だと感じていた。しかし、就職活動を通して、自分は社会に適合できる人間であるという意識が生まれ、それからは自身を社会不適合者だと思っていないと述べていた。一方、B さんは、自身を比較的常識的な人間であるとみなしており、シャフテ軍団のメンバーといるときだけ社不であると考えていた。しかし、シャフテ軍団は、社会から煙たがられる存在であるとも考えていた。

これらのことから、普段彼らは一般的な有識者として、社会に適合しようと生活していることがわかる。そのため、学校やアルバイトには基本的に行ったり、周囲の人々と同じように就職活動をしたりもできている。しかし、その中で、社会に完全には適合できていないかもしれないという自己も感じているのではないだろうか。そして、そのような自己を「社不」という言葉で自虐的に表し、限られた人にもみ提示することで笑いをとる。そうすることで、他人から認められていることを感じ、完全に社会に適合できていない自分でも大丈夫だという安心感を得ているのではないかと考える。以上のように、「社不」という言葉には、社会に適合しようとしているものの、完全には適合できていない自己を安らげる役割があると考える。

参考文献

- ・ 貴戸理恵, 2018, 『「コミュ障」の社会学』, 青土社